九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『長生殿』訳注（九）

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/9612

出版情報：中国文学論集. 32, pp.138-153, 2003-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『長生殿』訳注（九）

竹村則行

凡例

一　『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『暈刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。

二　本訳注に当たり、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。

塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）
徐朔方校注『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）
曽永義『中国古典戯劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）
蔡運長『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）

三　本訳注では、主に前記参考書に於いてなお未注の故事出拠等について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。

四　**［曲牌名］**に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、**［ゴチック文字］**の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、および唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。

五　訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六　訳文は、**［ゴチック文字］**で示した「唱」部分の訳出を含め、荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて

平易な日本文となるように留意した。（「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。）それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚無い御指教をお願いする次第である。

七 前稿「『長生殿』訳注（一～三、六～八）」は『中国文学論集』二六～三十一号（九州大学中国文学会、一九九七～二〇〇二年）に訳載し、また、同（四・五）は『文学研究』九十七～八（九州大学文学部、二〇〇〇～〇一年）に訳載した。

八 本訳注（九）（第三十三～三十六齣）は、二〇〇二年一月～〇三年一月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、竹村が新たに浄書した。この間の演習に参加した院生は次の通りである。

蕭　燕婉　・　王　毓雯　・　垣見美樹香　・　河野　真人
西田真理子　・　景　献力　・　土屋　聡　・　陣内　孝文

第三十三齣　神訴

【仙呂入双調過曲】【柳揺金】（貼が二人の仙女と二人の仙官の隊列を連れて登場）**私は巧みに玉杼を操り、見事な機織りで仕上げた錦布を進呈するために、天宮の階段を過ぎる。珮玉を揺らしつつ、天の河に帰ろうとして[1]、鳳車に乗って雲中を行く。**見やれば、**一本の銀河が天空に燦然と輝き、下界を見下ろすと、山河が米粒のように小さく見える。**私は天孫の織女、天界の錦布を織り上げたので、天帝に進呈するところです。その途中に、一筋の怨みの気がまっすぐ天の河を衝いて立ち昇っているのが見える。下界は一体どの辺りでしょう。（呼ぶ介）仙官。（仙官が返事をする介）（貼）ごらん、この**煙でも霧でもない、ぼうっとかすんだ怨みの気を、ぼうっとかすんだ怨みの気を。ここは下界のどの辺りなのですか。**

（仙官が返事をして、下界を見る介をする）織女様に申し上げます。下界は馬嵬坡でございます。（貼）暫時駐車[2]を命じます。すぐに馬嵬坡の土地神を呼んで来るように。（仙官が返事をする介、皆で貼を囲んで高い処に坐らせる介）（仙官が内に向かって呼ぶ介）馬嵬坡の土地神はいずこに。（副浄が返事をして登場）はい、ただいま。

『長生殿』訳注（九）

【越調 鬪鵪鶉】 私が**廟で休んでいると、**ふと**空中から呼ぶ声がする。**それは**天上からのお召しであるが、**土地神の私に**何の用事があるのだろう。**（仙官が呼ぶ科）土地神、早く来なさい。（副浄）仙官がしきりに**大声で呼び立てるので、**私を驚かせ、**ばたばたと慌てさせる。**やむなく、私は急いで**着物の塵を払い、**くるくると**腰帯を巻き、**このぼろぼろの**天頂が平らな頭巾**を整え、あのぐにゃぐにゃ曲がった**眉の高さまである長杖**をついて出てゆく。

（仙官に会う科）仙官のお召しとは、一体何のご命令でしょう。（仙官）織女様がそなたをお呼びです。（副浄）

【紫花児序】 聞けば、私を呼んでいるのは**天孫織女**だという。土地神の私は、天の河のほとりで**渡しや橋の仕事**をしたこともないのに、一体どうして、織女は馬嵬まで来て**道を尋ねるのか。**（背を向ける科）お、そうか。きっと織女が**雲中に馬嵬を通り過ぎた時に、**私がここで**接待を全くしなかったので、**（哭く科）私のこのちっぽけな職を取り上げてしまうのだ。（振り向いて仙官に対する科）仙官様、私を憐れんで下さい。私は官位も低く、任地も貧しいために、接待が不十分でしたが、ここに特に紙銭一百枚を用意し、仙官に差し上げます。どうか織女様によろしくお取りなしを。見た通り、私のこの**廟は荒れ果てて冥途の判官もいなく、神棚の前の机上には**いつも**塵が積もり、階段は泥土で埋まり、香炉は草茫々のありさまです。**

（仙官が笑う科）誰があなたの紙銭など要るものですか。織女様があなたに尋ねたいことがあります。早く、早く行きなさい。（副浄を連れて織女に見える介）（副浄）馬嵬坡の土地神がお目通りします。織女様にはいつまでもお健やかでありますよう。（仙女）楽になさい。（副浄が立ち上がる科）（貼）土地神、私がこの地を通り過ぎると、そなたの持ち場の上空に、一筋の怨みの気がまっすぐ天の河まで立ち昇っているのが見えましたが、これは一体どういうことですか。（副浄）織女様に申し上げます。

【天浄沙】 これは、艶やかに輝いて**霓裳曲を舞う美女、**しなやかに**翠盤の上で軽やかに踊る人**のことでございます。（貼）それは誰のことですか。（副浄）それは、唐の天子の貴妃、楊玉環が、むざむざと**黄土の馬嵬坡で怨みを飲んで亡くなったので、**悲痛に堪えない**霊魂が昇天できず、**もうもうとした**黒雲となって天空まで吹き上っているのです。**

（貼）さては楊玉環でしたか。私も覚えていますが、天宝十載、私が天の河を渡った夕べに、彼女と唐の天子が長生殿で永遠に夫婦となるように誓っているのが見えました。それが今や怨霊になっているとは、何とも痛

ましいこと。土地神よ、彼女の最期の様子を私に聞かせて下さい。（副浄）

【調笑令】それは、**蜀への道すがら、貴妃様が天子の御車に従っておりますと、沸き立つような軍勢の声が四方から起こり、**痛ましくも**美人**（楊貴妃）**は天恩に背くことなく、哀れにも涙をのんで天子に永遠のお別れをしました。**たちまちのうちに、**花のような生命は三尺の組み紐に懸けられ、無残にも国のために身命を投げ出されました。**

（貼）貴妃はどのようにして国のために身を捧げたのか、そなたはもっと詳しく話して聞かせよ。（副浄）

【小桃紅】その日、**ごうごうと騒ぎ立てた警護兵が、**馬嵬駅を**四方から取り囲みました。**もしその時、**貴妃が奮起して潔く国難に対処しなかったならば、**どうして**国家の安全を保ち、天子に従って一路四川へ向かい、**天下の**万民を安心させることができたでしょう。**今日、**国家の再建を見ておりますのは、まことに、貴妃様が一命を捧げられたために天下の復興が成ったのではありませんか。**

（貼）そうはいっても、天下の主であって一婦人を庇えぬとは、あの長生殿の誓いはどこへ行ったのか。李三郎（玄宗）はまことに薄情であることよ。

（副浄）織女様、かの楊貴妃は、

【禿厮児】九重の崇高な方（天子）**が義理愛情に背いたことを**決して怨まず、ひたすら**あの世で冤罪の晴れるのを**待っているのです。痛ましいことに、**天子との情縁は断絶して再び結ばれることは無く、**いつも**今日の境遇を悲しみ、当時のことを追憶して、啜り泣いておられます。**

（貼）彼女は一体何と言っているのですか。

【聖薬王】貴妃がおっしゃるには、**天子の恩愛が断たれても、**あの**長生殿での誓いは虚しいものではないと。**たとえ、**情に背き、意に違うことがあっても、**あの日、陛下から賜った**黄金の釵と螺鈿の小箱に示された堅い誓いには背くことができない。恨みを抱くことをせず、冥土で堪え忍んでいると。**

（貼）彼女はもともと蓬莱宮の仙女だったのですが、前悪のために本来の姿をなくしたのです。彼女が今の境遇にあって、なお長生殿での誓いを忘れないとは。彼女のこの真実の愛情は、まことに憐れむべきものがあります。（副浄）織女様に再び申し上げます。楊貴妃様は近頃、ますます以前の罪を深く悔いております。（貼）ど

うして分かるのですか。（副浄）

【麻郎児】彼女は毎夜、**星に向かっては胸に手を当てて涙ながらに訴え、月に対しては頭を地に打ちつけて悲しみ嘆き、積もり重なった深い罪業を後悔し、その罪業が消滅するように切に祈り求めています。**

【幺篇】それで彼女は、**悲しみ怨み、悔恨の思いを口にし、苦しんでいるのです。**例えその思いが**白い虹となって天宮まで届かない**としても、その恨みは**結ぼれて黒紫の怨念となって、冥土を衝き破り、**はからずも**青空を突き抜けて仙女様の通路を遮っていたのです。**

（貼）なるほど、そうでしたか。彼女が前非を悔いているのならば、全ての罪は許されます。私は天帝に上奏し、彼女が仙女に復帰できるようにします。（副浄）織女様、

【絡糸娘】例え**上奏して彼女を仙女に復帰させたとしても、**彼女には**まだ俗界の痴情が多く残っており、恐らく仙宮へ帰っても孤独に過ごすことでしょう。どうか以前の玄宗と夫婦になる永遠の誓いをかなえて下さいますよう。**

（貼）この子は本当に愛情一途なのですね。そなたは自分の持ち場へ戻りなさい。私に考えがあります。（副浄）かしこまりました。

【尾声】私は貴妃に代わって、その真情をはっきりと織女様に訴えた。幸いにこれからは織女様が取りはからって下さる。これで、馬嵬坡で**悶え苦しむ霊魂が一つなくなるだろうし、**そしてきっと、**蓬莱山に古馴染みの仙女が一人増えるであろう。**

（退場）（貼）出発します。璣璇宮へ帰るように。（皆が返事をして導いて行く介）

【仙呂入双調過曲】【金字段】【金字令】美人薄命というが、聞けば楊貴妃は本当に無実である。彼女はあの世で深く恨んでいるが、聞けば悲痛の極み。そうであっても彼女は操を正しくし、玄宗との生前の誓いに背かなかった。【三段子】彼女の深い悔悟は愛情が真実であることを露わにし、彼女の堅く変わらぬ愛情から永遠の金丹が生まれる。今はただ彼女を仙女に復帰させ、地上と天上の尽きせぬ恨みを補い満たすようにしましょう。

蘂珠宮へ朝礼に赴く行きしな、

鵲鳥が天界へ通じる橋を架けている。　劉威
目を凝らして下界を眺めやれば、　方干
天恩は既に断たれ、全てが空しくなってしまった。　盧弼

注

（1）原文は「揺珮還星渚」。王建「七夕曲」（『全唐詩』巻二九八）に「流蘇翠帳星渚間、環珮無声灯寂寂」と。
（2）原文は「暫駐雲車」。杜甫「送孔巣父謝病帰遊江東兼呈李白」詩（『杜詩詳注』巻一）に「蓬萊織女回雲車」と。

第三十四齣　刺逆

（丑が李猪児に扮し、宦官の帽子、毛織りの笠、射手の服装で登場）「私は小柄な体に短衣を身につけ、高い梁の上を行くこともでき、壁も越えられる。懐中にはこっそり匕首を蔵しており、眉間に皺をよせて必殺のチャンスをうかがう。」私は李猪児、幼い頃から安禄山の幕下にいるが、敏捷で聡明なので、息子同様の待遇です。ある日、安禄山は酒に酔って、急に頭は猪、体は龍の化け物に変身し、自分は猪龍であり、天子になる運命だと申しました。それで私の名前を出まかせに猪児としたのです。あろうことか、彼は果たして皇帝になったが、段夫人を寵愛しており、その息子の慶恩を太子に立てようとしている。見るところ、私李猪児にはこの天子の平天冠を頭に載せる福運は無いだろうが、長男の安慶緒大将軍にもその幸運が回って来ることはあるまい。そこで大将軍は憤懣を抱き、私と相謀り、私が今夜宮中に忍び入って安禄山を刺殺するようにしたのだ。おお、安禄山よ、安禄山、お前は唐の天子の大恩を受けながら、尚かつ挙兵して謀反したのだから、私李猪児の今日の非情を悪く思わないでくれよ。（内で二更の午後十時を打つ介）おや、城楼で太鼓を二つ打ったぞ。ではこの闇夜に紛れ、宮殿の壁伝いに行ってみよ

う。（行く介）

〔双調二犯江児水〕鬱蒼と茂る森の中の小道、鬱蒼と茂る森の中の小道をどこまでも歩く。**夜は更けて物音一つしない。**（内で鳥の鳴き声の介をする）**塒の鳥が驚いて飛び立たぬよう、**（内で犬が吠える介をする）**犬がワンワンと吠えているが、事が露見しないようにしなければ。**（内で時刻を打つ介）あっちから夜回りがやって来たぞ。しばらく大樹のかげにかくれて、やり過ごそう。（かくれる介）（小生、末、中浄、老旦が四名の兵士に扮し、夜回りをしながら登場）我ら安禄山百万の軍隊中の四名が見回れば、九重の宮門の外に深夜零時の月が出ている。（末）兄貴ら、あの御河橋のところの木の枝は、どうしてやたらに揺れているんだろう。（老旦）中にスパイがいるんじゃないの。（中浄）ここのどこにスパイなどいよう。大方、柳の幽霊だろうよ。（小生）ふん、お前ら、風が出てきたのが聞こえないのか。（衆）かまわずに、ぐるっと見回ってしまおう。（舞台を回って退場）（丑が身をあらわして行く介）ああびっくりした。見れば、**見回りは暗闇の中で銅鑼をたたき、御橋を過ぎて行く。星影の中を雲が流れ、月影に花が揺れる。危うく風で自分の居所がばれるところだった。**来てみれば、ここはもう奥御殿の近く、塀を跳び越えよう。**宮苑の塀がどんなに高くても、宮苑の塀がどんなに高くても恐れることはない。ひらりと一跳びすれば、**（跳び越える介をする）**もう俺様はひらりと跳び越えたぞ。**（内で音楽を奏する介をする）おや、こんな時間にまだ音楽や歌声がするぞ。幸い俺は宮中の道は知り尽くしているから、ゆっくり行くことにしよう。**やつが泥酔して、宴席が終わるのを待とう。**

（退場するそぶり）（浄が酔態をなし、老旦、中浄と二名の宮女が介抱する。二名の雑が内侍に扮し、提灯を提げて登場）わしは酔った。便殿へ行って休むぞ。（雑が浄を案内して到着する介）（浄が坐る介）（二名の雑が先に退場）（浄）宮女よ、段夫人は宮殿へ戻ったか。（老旦、中浄）戻られました。（浄）茶を持って参れ。（老旦、中浄が返事をして退場）（浄が酒から醒めて歎く介をする）ああ、自分はもともと酔ってなどいない。じぶんはただ長安を破った後、中原を席巻しようと考えていた。それが思わぬことに、各地の将軍が郭子儀に続けて大敗したため、心中甚だ面白くないのだ。それに、段夫人を寵愛して酒色の度が過ぎたために、自分の身体がぐったりと疲れているだけでなく、両目も見えなくなってしまった。そこで今夜は酒に酔ったふりをして、段夫人を宮殿に帰し、自分は便殿で安眠し、一晩休養しようと思う。（老旦と中浄がお茶を持って登場）帝王さま、お茶をどうぞ。（浄がお茶を飲む介をする）（内で深夜零時の時

を打つ介）（中浄）もう夜も更けました。帝王様にはお休みを。（浄）宮女ども、宮殿の門をしっかりと閉めよ。（老旦と中浄が返事をして、門を閉める介をする）（浄が眠る介）（老旦と中浄が坐ってうとうとする介）（浄が驚き怪しむ介をする）何故か今夜は寝ても寝付かれず、眼がチカチカする。（呼ぶ介）宮女、宮女よ。（中浄が驚いて眼が醒める介）帝王様はきっと一人で寝付かれずに、あちらで人を呼んでいるのだわ。姐さん、行ってみてよ。（老旦）姐さん、やはりあなたが行って。（押し合いながら、ふざける介）（浄がまた呼ぶ介）宮女よ、誰かが私を眠りから醒まそうとしているのだ。（老旦、中浄）誰もおりませんよ。（浄）外回りの兵士に、注意して見回るように伝えよ。（老旦、中浄）かしこまりました。（門を開けて外に出、内に向かって伝える介）（内で返事をする介）（老旦と中浄が門を閉め忘れて便殿に入り、再び坐ってうとうとする介）（浄が寝付かれない介をする）また一つ思い出したぞ。段夫人が私に自分の子の安慶恩を太子にたてるように要求していたが、これは明日決めることにしよう。（眠りにつく介をする）（丑が潜かに登場）この俺李猪児は暗闇に紛れて、ずっと待っておった。宴席の音楽や歌声が止んだと思ったら、段夫人は宮殿に帰り、安禄山は酔って便殿で休むという。これは絶好の機会だ。（行く介）

［前腔］身を潜めつつ行く、覚られぬように身を潜めつつ行く。（内で「注意して見回るように」と叫ぶ介）**見回りが無駄に騒いでいるが、**どうして知ろう、この俺様が**宮門をこっそりと回り、苑内を斜めにかすめたことを。折りよく暗君は泥酔してつぶれている。**ここはもう便殿だ。幸運にも門が半分開いているぞ。身をくぐらせて入ることにしよう。（入る介）**門の取手を揺らさぬように。**（聴く介をする）**やつの高鼾（いびき）が宮殿の角まで聞こえる。**ほら、宿直の宮女もみな眠っている。（灯芯を切る介をする）**灯芯を切り、**（カーテンをめくる介）**薄絹のカーテンをめくり上げ、**（小刀を取り出す介）必ずや、この**死にぞこないの息の根を即刻止めてやるぞ。**（浄が寝言をいい、丑は驚いて地に伏せるが、やがてゆっくり起き、じっと聴く介）**夢の中のたわごと、さては夢の中のたわごとか。**（内で午前二時の時を打つ介をする）**夜更けの時刻を頻りに告げている。この頻りに告げる時刻の音**がしているうちに、力いっぱい、**奴の心臓に小刀を刺し通す。**（浄を刺殺して急いで退場）（浄が大声をあげて地に倒れ、何度も飛び跳ねて死ぬ介をする）（老旦と中浄が驚いて眼が醒める介）どこでこんなに地響きがするんだろう？（見る介）ややっ、大変だ！（外に向かって叫ぶ介）外の宿直兵、早く来て！（四名の雑に扮した兵士が登場）どうして驚き騒いでいるのだ？（老旦、中浄）帝王様が夢の中で急に大声を出された

ので、急いで起きてみたら、全身血まみれで床に倒れていたのです。（四名の雑）そんなことが？（中に入って見る介をする）やっ、心臓を一突きされて死んでいるぞ。おかしいぞ。我々は外をしっかりと守っており、多くの巡察兵が通路を固めていた。この賊はどこから来たのだ？　つまりはお前らがしでかしたのだな。（老旦、中浄）よくもでたらめを。あなた達が外を警護している時に、賊を中に入れたのよ。明日（安慶緒）大将軍の尋問で、あなた達は皆死罪になるに決まっている。（兵士）お前らは罪をなすりつけるのか。（騒ぐ介）（雑が将官に扮して登場）「宮殿に凶報が伝わり、東宮から詔命が発令された。」大将軍様の詔令である。主上は唐の郭子儀が放った刺客に刺殺された。ただちに兵士に担がせて亡骸を段夫人の宮中まで運んで殯し、（安慶緒）大将軍の即位をまって喪を発するように。（四名の雑）かしこまりました。（浄の屍を担いで、雑について退場）（老旦と中浄が内に向かう介）

魚紋を施した匕首が安禄山の乗る車の座席を襲撃する。　劉　禹錫
当直の巡察兵が宮殿を見回る中、　王　建
安禄山は利剣で心臓を一突きされ、脳みそは地に塗れる。　陸　亀蒙
刺客の足跡は早に人混みにかき消え、行方知れない。　趙　嘏

第三十五齣　収　京

【仙呂過曲】【甘州歌】【八声甘州】（外が金色の甲をかぶり、軍服を身に付け、生、小生、浄、末が四名の将官に扮して、それぞれ馬に乗り、二名の兵士が軍旗を持って歩いて登場）**我らが威風堂々と進軍すれば、喜ばしくも帝京には明るく日が照り、郊外は風も静か。凶兆の帚星たる叛賊をば一掃し、天下の再興を眼の当たりに見る。鞭を振るって頻りに鎧を鳴らして行くが、皇朝の再建にはやるべき仕事が甚だ多い。**（外）私は郭子儀、命を奉じて軍隊を率い、賊軍を討伐する。幸いに安禄山は殺され、安慶緒は逃走した。我ら大小三軍はこのまま進軍して、長安に凱旋するぞ。（皆が返事をして進軍する介）

［排歌］馬の手綱を控え、城門の吊り橋に近づく。すると、**長安の父老たちが我らの軍旗を伏し拝む**のが見える。**歓呼の声が響き、高い笑い声が挙がり、女どもが首飾りを売って美酒を献上してくれる。**

（到着する介）（衆）元帥閣下に申し上げます。京都に入りました。どうか龍虎衛の軍営にてしばらく駐屯を。（外と衆が馬から下りて中に入る。外が正面に坐り、四名の将官がその傍に坐る介）「（外）思うは昔、長安の全盛の頃、（生、小生）今日再び来てみれば、悲しみに堪えない。（浄、末）祖国の山河を見渡して、はらはら流れる涙を頻りに拭い、（外）今やっとあの長安新豊館の壁に書かれた詩の意味が分かった。」（四名の将官）郭元帥にお尋ねします。「新豊館の壁に書かれた詩」とは何のことですか？（外）皆は知るまいが、本官が昔初めて長安に来た時、偶々酒楼の壁上に、術者の李遐周の題詩を見つけたのだ。（四名の将官）どんな詩が書かれていたのですか？（外）その詩はこうだ。「燕市から人が皆いなくなり、函谷関の馬は帰って来ない。もし山下で鬼に逢ったならば、その鬼は玉環（腕輪）に薄絹を巻き付けているであろう」と。（四名の将官）一体どんな意味なんです？（外）その時はよく分からなかったが、今から見れば、一句一句その通りなんだ。（四名の将官）詳しくお聞かせ下さい。（外）范陽節度使の安禄山は燕京の軍馬を統括し、洛陽長安の両京を陥れた。これこそ「燕市から人が皆いなくなる」ではないか。その後、哥舒翰の軍が潼関で安禄山軍に敗れた。これがまさしく「函谷函の馬は帰って来ない」だ。（四名の将官）なるほど、果たしてその通りだ。後の両句は一体どういう意味ですか。（外）「山下の鬼」とは馬嵬の「嵬」字であり、「玉環」は楊貴妃の名前、つまり、馬嵬で楊貴妃が死を賜った事を意味するのだ。（四名の将官）なるほどそうか。物事は全て前から決まっていたんですね。今日、郭元帥の武威により、宮殿を再び奪回されたのは、真に稀代の功績です。（外が歎く介）おう、長安を奪回したとはいえ、天子はまだ霊武におられ、明皇は遠く成都におられる。そして百官は田野に隠れ、庶民もまだ郷里に帰って来ていない。まず何より先に宮殿を清め、御陵をきれいにしなければならない。そして儀礼の楽器を本来の位置に据え、宗廟も元通りに復旧するようにし、明皇が西の成都から戻られ、今上陛下が東方の長安へ還御されて、やっとこの郭子儀の一身の大事が完了するのである。（四名の将官が恭しく礼をする介）全て元帥閣下に従います。「この手で再び唐の国家を支え、この肩で李朝の天下を担う。」（外）口で言うのはたやすいが、この中興の大事はやらねばならぬ事

が多い。諸君にもどうかご指導願いたい。（四名の将官）指導など、とんでもありません。（外）

【商調過曲】【高陽台】安禄山の生臭野郎が狼藉の限りを尽くした為に、祖廟や御陵は手入れもされずに荒れ果て、塵や埃が薄暗く舞い散る。宮中には久しく楽器懸けもなくて儀礼を欠き、私は心傷めて血の涙がたえず滴り落ちる。（合唱）**今や幸いに妖魔が一掃されました。一刻も早く宮殿や御陵の掃除や修理をしましょう。**（外）左営の将官よ、これへ。（生）はっ。（外）お前はこの軍令の小旗を持ち、夜を日についで、行って人夫を雇い、御陵や祖廟の掃除や修復をして、天子が還御して祭礼ができるようにするのだ。（合唱）**春になり、桜桃（ゆすらうめ）の実が熟する頃、宗廟に季節の果物をお供えできるように。**

（外が軍令の小旗を渡し、生が受け取る介）かしこまりました。（末）元帥閣下に申し上げます。長安の秩序は回復しましたが、十軒のうち九軒は空屋となっています。当面の急務は流民を招集し、もとの生業に就かせることです。（外）まったくその通りだ。

【前腔】【換頭】哀惜に堪えないのは、千戸もの家で人や物が狩り集められ、うち百戸ほどが他郷に流出し、悲しい泣き声が道路に満ちていること。一刻も早く彼らを呼び戻し、その住まいに物資が満ちるようにしなければ。（合唱）**安心して集まり、春深く、田野に農耕を早く始めよう、折りよく兵乱も収拾されたし。**（外）右営の将官、これへ。（小生）はっ。（外）お前はこの軍令の小旗を持って行き、高札を出して人々を安心させ、もとの生業に就かせるのだ。（合唱）**郊外の農村にあまねく知らせ、婦女子供を安心させ、農耕や機織りの生業に勉めさせる。**

（外が軍令の小旗を渡し、小生が受け取る介）かしこまりました。（浄）元帥閣下、新興なった国家に綱紀を引き締めるには、旧臣を招いて、共に国事を図るべきです。（外）この言葉は私の考えにぴったりだ。

【前腔】【換頭】私が国家の大綱を暫時統括し、一人大任を担うとはいっても、皆が心を合わせて随時協力してくれることが必要だ。群臣百官[1]よ、国家の再興は諸君の妙案に掛かっているのだ。（合唱）**昔、漢の光武帝の時に南陽に瑞気が満ちていたように、今や朝廷に再興の気が溢れているのが嬉しい。我らは共に協力して旧制度を再整備しよう。**（外）後営の将官、これへ。（末）はっ。（外）お前はこの軍令の小旗を百官に掲示し、全員三日以内に我が軍へ出頭し、共に国事に当たるように伝えるのだ。（合唱）**百官は国家の再興を輔佐し、天下太平の機運に乗って、影が**

形に沿い、雲が集まるように四方から集まってくる。

（外が軍令の小旗を渡し、末が受け取る介）かしこまりました。（生、小生）元帥閣下に申し上げます。都長安に久しく天子がおられないため、人々は天顔を仰ぐことを渇望致しております。復興の政務は万端順々に執り行いますが、まずは天子が都へ還御されることが先決かと存じます。（外）二人の言うことは中興の大義である。本官はとっくに天子をお迎えするための上奏文[2]を用意して、ここに持っておるぞ。

【前腔】【換頭】遙かに見やれば[3]、行宮は雲におおわれ、明皇は西蜀へ蒙塵されたまま。臣が心は朝夕安堵することが無い。天子が還御されてこそ、皆が心を一にすることができる。（皆が共に泣く科）（合唱）**悲しいことに、天子がおられないので人々は久しく痛恨の思いをしている。どうか一日も早く尊顔を拝したいものだ。**（外）前営の将官、これへ。（浄）はっ。（外）お前はこの軍令の小旗を持って、警衛軍五千人を引き連れて天子の車駕を整備するように。私の上奏文をたずさえて霊武へ行き、今上皇帝が宗廟への報告のために長安へ還御されるのをお迎えするのだ。また詔命を頂戴して使者を成都へやり、明皇のご帰還をお待ちするのだ。（浄が小旗を受け取る介）かしこまりました。（外）左右の者、香炉を持ってこい。今から上奏文を拝し奉るのだ。（雑が返事をして、香炉をしつらえる。丑が司祭に扮して登場し、儀礼を執り行う）（外が四名の将官と共に上奏文を奉る介）（合唱）**諸軍の前において、天地神明に誓い、我らは共に明君を尊崇する。**

（丑が退場）（浄が上奏文を捧げ持つ介）（四名の将官）我らはこれにて出発します。

（合唱）　叛賊を平定するのは、あっという間、　　方干
（外）　戦後も、山河は変わりなく帝国をささえている。　　皮日休
（合唱）　長安の町中に響く祝いの歌舞音曲を聴いてごらん、　　杜牧
　　空の風や雲さえも、長しえに宮殿を警護しているかのようだ。　　李商隠

注

（1）原文は「百爾臣工」。『詩経』「邶風・雄雉」に「百爾君子、不知徳行」と。

（2）『全唐文』巻三三二に収める郭子儀の「請車駕還京奏」を指すであろう。
（3）原文は「目極」。『楚辞』「招魂」に「目極千里兮傷春心」と。

第三十六齣　看　襪

【商調過曲】【呉小四】（老旦が酒店の婆さんに扮して登場）**馬嵬坡のほとり、小道の奥で、私は貴妃様の錦の足袋を拾いました。私は酒店を開いて酒を売っておりますが、店に来るお客さんは、みな足袋を見て行きます。おかげで店の方も何とかなり、心配はありません。**

私は王婆さん、ずっとこの馬嵬坡のほとりで侘びしい酒店をやっております。安禄山の乱が起き、人々は逃げ出してしまいました。その時、私は馬嵬駅の仏堂に隠れました。ふと見ると、梨の樹の下に錦の足袋が片方ありまして、それが楊貴妃様の遺品でした。私はそれを今もしまっておりますが、これがお宝になろうとは思いもしませんでした。今や郭元帥様が賊を破って京都の秩序を回復し、再び平和になりましたので、私は以前のようにここで酒店を開いております。およそ、あちこちから来るお客さんは、錦の足袋があることを聞くと、みなこの店に来て酒を飲み、足袋を見ようとします。酒代とは別に足袋の見料もあり、商売はたんと儲かっています。（笑う介）この婆にも運が向いて来たのだわ。今朝も店を開いたし、きっと客が来るに違いないわ。（退場するそぶり）（小生が頭巾と平服を身につけ、歩いて登場）

【中呂過曲】【駐馬聽】**天子の御車は西方へ行幸され、貴妃が亡くなった馬嵬駅には、永久に晴れぬ恨みが残っている。嘆かわしいのは、ここで美人が命を落とし、その墓は王昭君の青塚のように荒れ果て、その生命は夫差の娘の紫玉のように儚くなってしまったこと。**私は李亳、兵乱で道路が不通となり、京都を出られずにいます。今やっと平和になって喜んでおりますが、聞けば、馬嵬坡のほとりの王婆さんの酒店に、貴妃様の錦の足袋があるとのこと。それで、拝観に行こうと思います。おや、向こうから女道士がやって来たぞ。（丑が女道士に扮して登場）「見渡す限りの山河の変貌を見て涙が流れ落ちる。ここには貴妃様の錦の足袋があって、人に見せているという。」（出会う介）（小生）

道士さん、どちらから来なさった？（丑）私は金陵（南京）の女貞観の観主です。京都に『道藏』を購入しに来ましたが、兵乱に遭って帰れずにいます。先ほど、王婆さんの店に楊貴妃様の錦の足袋があると聞いたので、特に見に来たのです。（小生）なるほど、あなたも足袋を見に来たのですか。それなら一緒に参りましょう。（一緒に行く介）（合唱）**玉の貌の美人**（楊貴妃）**はこの世を去って行方は知れず、傷ましくも田舎の酒店に形見の錦の足袋を残すという。**では、**そこで酒を買ってゆっくりと飲み、しばしの間、それを手に取ってじっくりと見てみることにしよう。**

（小生）ここがその店だ。さあ中に入ろう。（一緒に入る介をする）（老旦が出迎えて登場）奥の方へどうぞ。（小生と丑が坐る介をする）（外が登場）わしは郭従謹、幸いに兵乱が終息したので、華山にお参りに行こうと思う。この馬嵬坡を通るころ、歩き疲れてしまった。ここに酒店があるので、二三杯やって行こう。（入る介）ご主人、酒をたのむ。（老旦）はい、お酒だね。（外が小生や丑と出会う介）どうも。（小生が老旦に向かう介）王婆さん、我らがここに来たのは、一つは酒を飲むためだが、二つは、ここに貴妃様の錦の足袋があると聞いたので、拝観しようと思ったからだ。（老旦がにっこり笑う介）錦の足袋なら確かにここにございますよ。私はずっと、**［前腔］この宝物を大切に守り、幾重にも包んで今日までしまって来ました。香りが消えぬよう、光沢を失わぬよう、シミや汚れがつかぬようにしてございます。この足袋は本当に珍重すべきお宝でして、道行く人は皆これを見ようとして、我れ先に立ち寄って飲んで行かれるのですよ。**お客さん、**お代さえ惜しまなければ、どうぞ手にとって存分に見せて差し上げましょう。**

（小生）もちろんですとも。我々は酒代とは別にお金を払いますよ。（老旦）そんなら、私めが持って参りましょう。（退場するそぶり）（足袋を持って登場）「この足袋は、おみ足を通さなくなってもまだ艶があり、薄絹にしっかり巻かれて良い香りがする。」（小生）お客さん、これが錦の足袋です。どうぞご覧を。（小生が受け取り、開いて丑と共に見る介をする）おお、ほら、錦の綾はきめ細かで、つくりもしっかりしている。まだ艶光沢があり、芳香も消えていない。まことにこの世の物ではありませんよ。（丑）本当に良い香りだ。（外は酒を飲んで、見向きもしない介をする）（小生が足袋を持って起ち、見る介をする）

［駐雲飛］見てご覧、**足袋に薄く裏打ちされた真綿は、天上の雲のように軽くて柔らか。以前、貴妃がこれを宮中**

で履いて、楚々と歩いても誰も見ることは無かった。それが憐れにも、今日この酒店で無造作にひろげて見ようとは。見れば、**足袋の縫い取りのあとは、貴妃様の傷心の怨みを縫いつけたかのよう。**悲しくも、**絶世の美女がこの上ない冤罪を受け、**空しくも**この足袋が残って、永遠の思いを後世に伝えることとなった。**

（外が怒る介をする）おい、だんな、そんな物見て何だってんだ。わしが思うに、天宝皇帝は貴妃をひたすら寵愛して、朝夕歓楽に耽ったばっかりに、朝廷の綱紀が弛み、四方に兵乱が起こって、人民が塗炭の苦しみを味わうことになったんだ。わしは人生も残り少なくなって、この戦乱や離散に見舞われた。今日この錦の足袋を見て、まことに痛恨の極みだ！

【前腔】思えば昔、**貴妃様は縫い上がったばかりの新しい錦の足袋を、おみ足にぴったり履いて地面を歩まれた。その上には多くの襞（ひだ）が撚（よ）った美しい湖南刺繍の裳裾が覆い、貴妃が歩を進めると、天子が真っ先に賞愛されたものだ。ああ、歓楽が極まれば災禍を招き、万民が被害を被る。**今日、**馬嵬の変事は過ぎ、その人は亡くなり、錦の足袋だけが空しく残されている。**私はここで、**思いがけなく貴妃の美しい綾足袋を見て、重ねて痛恨の思いがし、国難を思い起こしては、また涙を拭う。**

（老旦）おや、このお客さんは錦の足袋を見て、どうして怒っているんだろう？ ひょっとして見料を出さないというのでは。（外）見料とは何だ？（老旦）やっぱり田舎者だ。見料も知らないなんて。（小生）こんな小さな事、言い争うまでもありません。（丑に向かう介）女道士さんもよくご覧なさい。（老旦に向かう介）私がまとめてお金を払います。（足袋を渡す介）（丑が受け取って見る介）ああ、思えば、太真妃様は絶世の美女でありながら、その美貌は忽ちに消滅した。今日、この足袋が残っているが、佳人が生き返ることは無い。本当に悲しいことです。

【前腔】ほら、**翠（みどり）や紅の絹糸で縫い取られた花や葉の刺繍がみごとなこと。輝く足袋は一揃いではなく、片方の鳳凰が残っているだけ。全ては空しい。足袋だけがここまで流浪して、恨みは尽きない。この足袋は、貴妃様の馬嵬の夢のあとを偲ぶもの。傾国や傾城の絶世の美貌も、夢幻となっては何になろう。残された足袋の綾模様に対して往事を偲ぶのはよそう。栄華といっても、暁の風と共に儚く消え去るのだ。**

（足袋を老旦に渡す介）おばあさん、思えば太真貴妃様はもともと仙女が下界に転生されたもの。できればこの足

袋を喜捨していただき、私が金陵の女貞観に持ち帰って、太真貴妃を供養したいのですが、如何でしょう？（老旦が笑う介）私は息子も娘もなく、余生の渡世はすべてこの足袋に掛かっています。お求めには応じかねます。（小生）なら、私が高価で足袋を買い取りますが、どうです？（外）そんな札付きの代物を手に入れて、どうしようってんだ！（老旦）私は売りもしませんよ。（外がお金を払う介をする）酒代を取っときな。（小生がお金を払う介をする）我々の足袋の見料は、まとめてここに。（老旦が受け取る介）お有り難うございます。

（老旦）　世上の風光の美に酔っても、それがいつもあると思うな。　鮑　溶
（丑）　美しい真珠や翡翠に彩られた栄華が、これまで何度俗塵に塗（まみ）れたことか。　盧　綸
（小生）　今この馬嵬坡には、貴妃の形見の三日月状の足袋が遺され、　李　益
（外）　この郊外に大勢の見物人がそれを見にやって来る。　宋　之問

※　前稿の訂正

前稿「『長生殿』訳注（八）」（『中国文学論集』三十一、二〇〇二年）について、岩城秀夫先生から以下の二点のご指摘があった。謹んで訂正し、拙稿の不備を指正いただいた先生に感謝申し上げる。

（一）九三頁十二行　第二十九齣　聞鈴
　原訳文：この鈴の音は何とすばらしいことか。
　訂正文：この鈴の音は何と意地悪なことか。
（二）一〇一頁後から三～二行　第三十二齣　哭像
　原訳文：供物の瓜や旗、貴妃用の傘や扇、
　訂正文：瓜形の旗や傘、扇等の儀仗具を伴った